国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the -ja Construction in the Tarama Dialect of Southern Ryukyuan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下地, 賀代子, SHIMOJI, Kayoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000475

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 1: 35–51 (2011)
ISSN: 2186-134X print/2186-1358 online

南琉球・多良間島方言の基本的な ja 構文について

下地賀代子

沖縄国際大学
国立国語研究所 時空間変異研究系 プロジェクト研究員［–2011.03］

要旨

助辞 -ja は現代共通語の助辞「は」に対応し，琉球語全体で広く用いられている助辞である。だが，その研究の多くが -ja の出現形式や承接関係など形態論的な内容を示すに留まっており，その文法的機能や「意味」についての具体的な記述，また，現代共通語の「は」との違いといった観点からの考察があまりなされてこなかった。

このような現状を踏まえ，本研究では多良間島方言を対象に，-ja が現れる文の基本的なタイプを明らかにし，それぞれの文の構造や機能を記述・考察した。その結果，名詞述語文と形容詞述語文の NP-ja 主語は基本的に「判断の主題」を，動詞述語文の NP-ja 主語は基本的に「関連の主題」を表すことを示した。またその他の ja 構文として，存在動詞 aL 述語文，否定文，対比構文などがみとめられた *。

キーワード：琉球語，多良間島方言，助辞-ja

はじめに

本研究でとりあげる助辞 -ja は，現代共通語の助辞「は」に対応し，琉球語あるいは琉球方言（以下単に琉球語）全体で広く用いられている助辞である。だが，これまでの琉球語研究における助辞 -ja の研究は，その多くが出現形式や承接関係など形態論的な内容を示すに留まっており，その文法的機能や「意味」についての具体的な記述はあまり行われていない。すなわち，‘「対比」を表す・「主題」を示す’といったような記述はあるものの，どのような場合に -ja がこれらの意味や用法を実現するのか，また，現代共通語の「は」との違いはないのか，といった観点からの考察が積極的になされてきていないのである。

このような現状を踏まえ，本研究では多良間島方言[1]を対象に，-ja が現れる文の基本的なタイプを明らかにし，それぞれの文の構造や機能を記述・考察する。

用例について，すべて音韻表記を用いて示している[2]。また，たずね文などにおける語尾の上昇は「ka[kï」（書く？）のように示す。また訳文について，用例中の下線部あるいは太字の部分に該当する箇所に下線を引き，助辞など文中に現れていない要素は（　）に入れて示す。{ft.} は意

* 本稿は第 40 回 NINJAL サロン（2011.2.8 於国立国語研究所 2 階多目的室）における口頭発表を基としている。発表の席上，諸先生方より貴重なご助言を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

[1] 宮古諸島と八重山諸島のほぼ中間に位置し，隣の水納島と合わせて多良間村に行政区画されている。島内には仲筋と塩川の 2 集落があるが，語彙レベルでの音韻的な対立を除いて大きな違いは見られない。水納島方言と合わせて「多良間方言」と総称され，宮古諸方言の下位に位置づけられるのが一般的である。

[2] 本稿で用いている音韻表記の一部について，sj は [ʃ]，cj は [tʃ]，zj は [dʒ，ʒ]，h は [h，ç]，f は [ɸ] である。また N，M，L は成節的な子音であり，その音価はそれぞれ [n，ɲ，ŋ，ɴ，…]，[m]，[l] である。また促音は q で表している。

訳，{note.} は注記である。

1.「対比」と「主題」について

現代共通語の「は」に関する研究はこれまで盛んに行われてきている。野田（1996）は,「「は」に主題の用法と対比の用法があることは広く認められている」と前置きし，その 2 つの用法の関係性のいろいろな見方をまとめた上で[3]，自身の考えを次のように述べている。

> ここでは，本質説の長所とプロトタイプ説の長所をとりいれる形で，複合説というものを提案したい。複合説というのは，（中略）「は」は潜在的には次の（ア）と（イ）の 2 つの性質をあわせもっているという考えである。
>
> （ア）構造的には，その前と後を大きく 2 つの部分にわける
>
> （イ）意味的には，対比的な意味をつけくわえる
>
> この 2 つの性質のうち，（ア）が強くでると主題を表すことになり，（イ）が強くでると対比を表すことになると考える。（p. 274）

本研究における「主題」と「対比」の捉え方もこの野田（1996）の「複合説」の中におさめられるだろう。すなわち，これらは「前後両項の結合（通常は文そのもの）の成立を分節的に（他の事態との対立の意識をもって）承認する」などと説明される 1 つの性質によるものであり,「主題（提題）」と「対比」とは,「言わば縦と横の別の次元に属する働き」であると考える（尾上 1995: 29–35）。そしてそれぞれの働き＝性質の現れ方の強弱によって,「は」は「主題」をあるいは「対比」を，またその両方を（同時に）表すなどと捉えられるのである。

またこの「主題」については，その「解説」もしくは「説明」，すなわち述語部分によってさしだされるモノゴトとの関係によって,「主題」となっているモノゴトの属性を規定する文となる場合と,「主題」となっているモノゴトに関わるデキゴトやコトガラをのべたてる文となる場合がある。本研究では，野田（1996）の用語を用い，これらを「判断の主題」,「関連の主題」と呼んでおく（p. 279）。また，この 2 つのタイプにはその文の述語のタイプ―名詞述語文・形容詞述語文・動詞述語文―との関わりがある程度みとめられることから，本稿の第 3 節では，多良間島方言の ja 構文について，文のタイプごとに記述，考察を試みる。

---

[3] 野田（1996）では，従来の主題と対比の関係性のとらえ方を次の 5 つにまとめている。

1）対比派生説―主題の用法を基本とし，対比の用法を派生とする
2）主題派生説―対比の用法を基本とし，主題の用法を派生とする
3）構造本質説―「二分結合」など，構造的な面を本質とする
4）意味本質説―「とりたて」など，意味的な面を本質とする
5）プロトタイプ説―典型的な主題と典型的な対比が連続するとみる

そして，1）から 4）については，それぞれが「基本」または「本質」と考えるものの客観的な根拠が見つけにくいことを欠点として挙げている（pp. 274–275）。プロトタイプ説への言及は特になされていないのだが，これはともすると「主題」と「対比」とを同一レベルに見ているという誤解を招きかねないものであり，野田（1996）の「複合説」はこのような批判にも応えうるものとなっている。

2. 助辞 -ja の出現形式

まず，助辞 -ja の基本的な出現形式を，名詞語幹に直接している場合を用いて示す。-ja は前にくる名詞の末尾音により，[j] を脱落させ名詞語幹と融合して現れる。

(1) kata cja: ure:. saNpiNcja:-ja katasjada:L. 濃いお茶それは。さんぴん茶は濃い。

(2) i:-ju kaki:r-aN-gadu mi:L mi:-ja aL. 絵を描けないけど見る目はある。

(3) kunu zï:-ja fukasjaN-du kakï-ga:sja:L. この字は難しくて書きにくい。

(4) kju:-ja naNni:[ci. 今日は何日？

(5) tarama-kara oto:-ja ikï, nara: kuma-Nke: kï:-ti. 多良間からお父さんは行く {ft. 行った}，（それと入れ替わりで）自分はここへ来る {ft. 来た} って。

(6) a-ga bikiduM-ja sjaki-u num-aN=jo:. 私の夫は酒を飲まないよ。

(7) a:kicjami baN-ja uru:ba: sju:-maN. ああもう！私はそれはしない {ft. したくない}。

(8) kanagai-ja du:-ta-ni: auda-u ami:, qfacu-mai jasjai-mai, nu:-mai katami-taL. 昔は自分たちでもっこを編んで，鍬も野菜も，何でも運んだ。

(9) a-ga kui-ja kïki: wa:r-ai[LM. 私の声は聞こえなさいますか？

(10) uputunu-nu sjiNka: N:na nagito:-sjai-du sï:-ti:nu panasü: sji:, （その小刀を使えば）大殿の家来は皆なぎ倒されるとの話をして，

(11) bakamunu-nu Mme:,（中略）zjo:no:-ju mura-kara nugana:r-adaka: nar-aN ba:-u si:, 若者達は，上納を村から免れなければならない（という）ことで，{ft. ～自分たちの村の上納を免除してもらおうと}

(12) cuzuki: mi:-daka: ime: sus-aN. 続きを見なければ意味はわからない。

(13) nicï-nu Ndi-tui-du miga-ga kamacë: aka-ku:ku:-ti: buL. 熱が出て，ミガの頬はリンゴのように赤く火照っている。

(14) kunu pïto: pi:zi:-ja, M:na-N-ja susai-N-gutu（以下略）, この人は普段は，皆には知られないで，

(15) tuqra tiN-ju tubagari:L-ba du: kaqra:L. 鳥は天を飛んでいるから体（が）軽い。

以上のことから，多良間島方言の助辞 -ja の出現形式法則は次の表 1 のようにまとめられる。ただし，この出現形式法則は前接語が指示代名詞の場合を含まない。また，内省的な発話では融合が起こらないこともある。

表 1 助辞 -ja の出現法則

末尾音	現れ方	（例）
長母音 a:, i:, ï:, u:, o: 成接的子音 M, N	-ja（非脱落）	cja:-ja, mi:-ja, zï:-ja, kju:-ja, oto:-ja, bikiduM-ja, baN-ja
連母音 ai, ui, (ei)	-ja（非脱落）	kanagai-ja, kui-ja, (uNmei-ja)
短母音 a, e, i, ï, u	[j] の脱落，長母音化	sjiNka:, Mme:, ime:, kamacë:, pïto:
成節的子音 L	[j] の脱落，促音化	tuqra

※指示代名詞－末尾音は L だが促音化ではなく長母音化（ex. kuL ＋ -ja＞kure:）

続いて，格の「とりたて」方および他のとりたて助辞[4]との承接関係を示す。格の「とりたて」方については，連用的な nu 格および ga 格，ϕ 格，また ju 格では名詞（語幹）に直接し，それ以外の格形式（連体格形式，ba 格[5]を除く）では ja が格助辞に後接することによって，とりたて形式がつくられる[6]。

（16） ozji:-ja bur-aN=jo:. おじいさんはいないよ。
（17） ata: pana sjaki:L. 明日は花（が）咲いている。
（18） qva-ga na:-ja kïnu: su:-taL. あなたの名前は昨日知った。
（19） pa:isja-nu-du buL, ka:di-Nka:. (＜-Nka + -ja) 歯医者がいる，カーディには。{note. カーディは屋号。元々カーディ家があった場所に現在は歯医者が住んでいるということ }
（20） saNgacuhacuka-N-ja, naNka jokjo:-nu a-tui, 3 月 20 日には，何か余興があって，
（21） oba:-ja ja:ma-Nke:-ja wa:r-a[maN. おばあさんは八重山へはいらっしゃらない？
（22） naka-Nka-kara: sja:ru-nu zju:-sji:, tuNdi: ku:-ti su-ba, (＜-kara + -ja) （穴の）中からは猿の尾で {ft. 尾を掴んで }，出てこようとするから，
（23） kare: aN-to: icjafu-N ataL. (＜-tu + -ja) あの人は私とはいとこにあたる。
（24） niNgiN-nu cïkara-sji:-ja, mura-game: mutai-gu:sja-ne:N-ni:, (＜-gami + -ja) 人間の力では，村までは持てそうもないので，

その他，引用助辞 -ti:，比較助辞 -juL を含む節（句）のとりたて形式も，これらの助辞に -ja が後接することによって形づくられる。

（25） pari-N ami-ti:-ja ne:N. ata: pari-tui autiN-du naL. 晴れない雨とはない。明日は晴れて青空（に）なる。
（26） aN-juqra ni:ni:=jo:. （あの人は）私よりは兄さん（だ）よ。{note. 年上ということ }

また他のとりたて助辞との承接関係について，他の係助辞とでは〈疑問〉の -ga への後接という形でのみ現れうるようである。副助辞とではその前後関係は助辞によって異なっており，古典語の場合とは異なる[7]。なお，（28），（29）の -gami は〈限定・単純強調〉，（30）の -tuM は〈否定的限定強調〉という意味特徴をそれぞれ持つ。

[4] 宮田（1948），鈴木（1972）などに従い，とりたて助辞を「文または句の一部を特に取立てて，その部分をそれぞれの特別な意味において強調する」助辞と定義する（宮田 1948: 178）。ここにはいわゆる係助辞，副助辞が含まれる。但し，「主として句（文）の述語に影響する」，「句（文）の成分を意義の上から修飾する」（山田 1922: 142，( ) は引用者）というそれぞれの統語論的機能の違いをみとめ，明確な線引きは困難であるという前提のもと，これらをとりたて助辞の下位区分として扱っている。

[5] ba 格は ju 格（第 1 対格）の強調形 -juba から派生した形式であると考えられる。基本的な用法は ju 格と同じであるが，モーダルな面において差異があるようである。

[6] ni 格，Nke: 格のとりたて形式と思われる用例で，名詞（語幹）に -ja が直接している用例も観察された。
・harucjaN-ja e:-mai misi-N=na,-ti-ja, terebi-nu mi:-rai-N:. ハルちゃん（に）は（テレビの）絵も見せないね，って（ことだよ），テレビが見えない（よ）。{note. TV の前に座った夫を注意して }
・nagajamaja:-ja i[k-aN. ナガヤマヤー（へ）は行かない？ {ft. ～行かなかった？ }

[7] 多良間島方言のとりたてのカテゴリー全体の記述は別稿に譲る。なお，拙論（2006）『多良間方言の空間と時間の表現』（学位論文，千葉大学）の「序論 多良間方言概説」「3 形態論」に，体系表のみ示してある。

(27) seNsjo:-ga-ja ar-aN. akaguci-nu-du unai-N a-taL=pazï. 先勝は違うだろう（よ）。赤口がその間に {note. 友引と先勝の間に } あったはず。

(28) ta:-ga kaNsjinu sïgutu:-game: sji: ukï=ga-ti: M:na sjawagï-Nki:, 誰がそのような[8]仕事は {note. 主への投書 } したのかと皆騒ぎ立てて,

(29) kju:-game: aqcjaN. 今日は暑い。

(30) nusji-gama-u ni: buL-ke:, jakuniN-nu Mme-nu ki:, cjaga, cjaga-ti: sjauki:, au-fusjari ti:-ja-tuM ara:sjaN-gutu, 貝を煮ているところ（に），役人たちが来て，さあさあと連れて（行って），生臭くにおう手さえ洗わせないで,

(31) agai, purimunu-nu Mme, kare: kaNpuni-gama=do:. qvata: ure:-tuM sïs-aN=na:.
ああ，馬鹿たち（だね），あれは軟骨だよ。あなたたちはそれさえ知らないの。

3. ja 構文の基本的な型

以下，多良間島方言の ja 構文について，文の述語タイプごとに記述していく。

3.1 名詞述語文

3.1.1 [NP_1-ja NP_2 (COP)] I 型：「包摂関係」の名詞述語文

NP_2 からなる述語部分は，NP_1 が「何であるか」を説明しており，両者はイコール，あるいは包摂関係にある。このタイプの名詞述語文では主語が指し示すモノゴトのコンスタントな状態が表され，主語＝主題は基本的に「判断の主題」である。文全体がさしだすコトガラは非アクチュアルであり，単文の場合，述語はコピュラを伴わず名詞のみで現れることが多い。（なお，COP は「コピュラ」を指す。）

(32) kanu akaga:raja:-ja ko:cjo:sjiNsji:-ga ja:. あの赤瓦（の屋根の）家は校長先生の家。

(33) kïnu: a-ga sjuba-N bu-taL pïto:, ba-ga uqtu. 昨日私の傍にいた人は，私の弟。

(34) ninupa-N akasja:L pusï-nu mi:[raiL, ure: ninupa-busï=dara. 北西に（ある）明るい星が見える？あれは北極星よ。

(35) “kure: nai-nu naL ki:-nu nai. we:, kuL-u: muqtui ja:-Nke: ikï -tika:,（後略）” 「これは実のなる木の実。これを持って家へ行ったら，（後略）」

この方言のコピュラは「~(du) aL」（〜だ）という形式だが，動詞 jaL（やる）が補助動詞化し，コピュラ相当にふるまっている場合もある。NP_2 が原因や理由，逆接を表す従属節の述語となる場合は，その活用形をつくるために原則的に用いられる。例えば（39）では，最初の単文の述語にはコピュラは現れていないが，後の複文の従属節述語にはコピュラ的な jaL が現れている。

(36) akanaizukë: janafusja aLru-gadu kicigi pana-nu sjakï. 赤かたばみは雑草だけどきれいな花が咲く。

[8]「かたり」のスタイルのため，kuNsjinu（このような）となるところが kaNsjinu となっている。

(37) “ure nara-ga munu aL-ba, nara-N turasji” 「そいつは自分 {ft. 私 } のものだから，私に取らせ {ft. 返せ }」

(38) “uma: ba-ga zï: ari: mutagirai-daka: uma-N ucïki-mai junumunu” 「そこは私の土地だから，持ち上げられないならば，そこに置いても構わない」

(39) “（前略） nara: cukï-N butui-ja seikacu: sji: iki: ikaiL niNgiN. nara: tiN-nu niNgiN jaL-ba, Mme nara: tiNke: nu:raM” 「(前略) 自分は月にいて生活をしてやっていける人間 {ft. 私は月にいてこそ生活をしていける人間です }。自分 {ft. 私 } は天の人間だから，もう自分 {ft. 私 } は天へ上ろう」

また，語りの地の文などで，名詞述語がパーフェクトの形式をとって現れる場合がある。このときその文の主語＝主題は前の文脈に関わるものであり，「文と話の場面とのつながりをよくするために使われる」(野田 1996: 280)，「関連の主題」であると解される。すなわち，例えば以下の用例では「自分の稼ぎ」「妻」の属性についてのべたてることが，そのストーリーの背景や前提となるコトガラの提示となっている。

(40) Mme pataraki: seikacü: sji:, asji: Mme uNke: zjo:no:-ti-mai nu:-ti-mai ne:N Mme, du:-ga patarakë:, tada du:-ga seikacuhi ari: ukï=sja:. （ライ病患者たちは）働いて生活をして，それでもう彼らへ（は）上納とも何ともない（から），自分の働き {ft. 稼ぎ } は，ただ自分の生活費だったんだよ。

(41) miduM-ja Mme kukuru-game: kagi pïtu-du ari: ukï=sja:. （その男の）妻はもう心は綺麗な人だったんだよ。

また，以下に示す用例（42）～（45）ではそのいずれにも，感嘆詞や，同意，感動を表す終助辞が現れており，発話主体の感覚的な判断など，発話時・発話場面に強く結びついたコトガラがさしだされている。よって，このときの主題のタイプも「関連の主題」だと言える。またこのとき，NP_2 は形容詞[9] + 名詞であることが多い。

(42) agai oto:. kju:-nu sjake: uma sjaki=na oto:. ああオトー。今日の酒は美味しい酒ね，オトー。[狂言]

(43) hai, futa:L-ga uNcïN-ja utuL munu=do:. ねえ，2 人（分）の（飛行機の）運賃は恐ろしいものよ。{ft. 2 人分の航空運賃といったら大変なものだよ }

(44) “agai, kure: baga mucï kukuro: jana munu=na.” （母親の思惑とは逆に，継子ばかりが上手くいってしまうので）「ああ，これは，私の持つ心は嫌なものか」{ft. ～，私の考えることはだめなのか }

(45) agai ba-ga uja: kaNsji:nu pïtu-du ataL=na. ああ，私の父はこのような[10]人だったのか。{note. 父親の顔が見えると言われて覗き込んだ井戸の水面に写った自分の姿を見て }

[9] 多良間島方言のサアリ形容詞の語幹は連体修飾の用法をもっている。
[10] 注 8 に同じ。

3.1.2 [NP$_1$-ja NP$_2$ (COP)] II 型：「不足型」の名詞述語文

先にみたI型と形式は同じであるが，NP$_1$ と NP$_2$ がイコール，あるいは包摂関係になく，以下の（46），（47）では「年が」「毛色が」「通うのが」といったNP$_2$ の直接の主語が文中に現れていない。このような名詞述語文のタイプを「不足型」[11] と呼んでおく。このタイプの文の述語部分（NP$_2$）は，文脈や場面に依存しつつも「不足」している要素とともに文の主語（NP$_1$）が指し示すコトガラの性質を説明するものであり，よってその主題のタイプは「判断の主題」である。

（46） Mmadosji, taro:azja:. 午年（だよ），太郎兄さんは。
（47） tarama-nu nu:ma: M:na akagi:. 多良間の馬はみな赤毛。
（48） tunaL-nu taru:-ja, au-paNdaL jarabi-ti: ume: bu-taka: kaNsji: Mme cju:gaqko:-ti:. 隣のタルーは，青っぱなたれ（の）子供と思っていたらあのようにもう中学校って[12]。

また，NP$_1$ が「今日」「明日」のような時間名詞の名詞述語文も，「不足型」に含められるだろうか。（49），（50）の後の文は「〜がある」といった述語が，（50）の前の文は「曜日が」といった直接の主語が文中に現れていないと捉えられる。

（49） “a, kju-ja jo:ï aLru-gadu jasjai-nu ne:N, a: jasjai-nu aL busugi=na.” 「あ，今日はお祝いだけど野菜がない，あー野菜が欲しいな」
（50） kju:-ja suijo:bi. ata: gaqko:. 今日は水曜日。明日は学校。

だが次の用例では，「今日の夜は忘年会だから」という部分だけみれば（49）と同じであるが，その前に「私たちは」という別の主題があることによって主題性が薄れ，時間の状況語の単なるきわだたせとなっている。なお，対比性も弱い。

（51） “baNta: kju:-ga ju:-ja bo:neNkai ari: aNsji: jadu karasï kuto: diki-N” 「私たちは今日の夜は忘年会だから，そのように宿（を）借らすことはできない」

3.2 形容詞述語文 [13]

3.2.1 [NP-ja AP] 型：「特性規定」の形容詞述語文

このタイプの文におけるAPは，NPが「どのようなものであるか」を説明，規定するものであり，NP＝ヒトやモノにコンスタントに存在する「特性」（樋口 2001: 44）を表す形容詞述語である。主語＝主題は基本的に「判断の主題」であり，文全体がさしだすコトガラは，「包摂関係」の名詞述語文と同じく非アクチュアルである[14]。

---

[11] 野田（1996）で示されている，破格の主題をもつ文の3つのタイプ—過剰型・不足型・漠然型—の1つである。「必要なものが脱落し，不足しているために，整った格関係にもどせなくなったもの」と定義し（p. 76），いわゆる「うなぎ文」もここに含めている。森重（1965）では同様の現象に対し「消去—合入」という操作を示しているが，想定される文の要素が表面化していないものと捉えている点において両者は共通している。
[12] （48）について，「中学校」には「中学生」という意味がそもそもあるのではないかという指摘をいただいた。確認を急ぎたい。
[13] 本研究では便宜的に第1形容詞（サアリ形容詞）と第2形容詞（「ナ形容詞」に相当）とを区別していない。
[14] なお，その「特性」が「過去のあるときにあらわれた特性」（高橋 1986）である場合，そのコトガラは時

(52) kata cja: ure:. saNpiNcja:-ja katasjada:L. 濃いお茶それは。サンピン茶は濃い。(= (1))

(53) sjiNsji:-ja takasja:ri wa:L. 先生は（背が）高くていらっしゃる。

(54) kunu deNke: akasjada:L. この電球は明るい。

(55) kanu pïto: aparagisja:ri:, miduM: ju:-du nuzumaiL. あの人はかっこよくて，女性によくもてる。

(56) a-ga muno: ati u:sja:L-ba dame-ti ïzi:L=dara. （ハルエは）私のものはあまりにも大きいからダメ[15]って言っているんだよ。{note. じゃがいものこと}

だが，「特性」を表す形容詞述語文であっても，その形が驚きや感動といった発話主体の内的状態が反映される感嘆法などの形式をとっている場合（(57)，(58)），また文中に時間の規定語，状況語（節）などが現れている場合には（(59) ～ (61)），その表されるデキゴトは時間軸上におかれて一回的なものとなる。このとき，その文の主語＝主題は「関連の主題」であると捉えられる。

(57) kanu pïto: takasja=ja:. あの人は（背が）高くてねえ。

(58) kunu ki:-ja takasjaN. この木は高い。{note. 木の葉を取ろうとして}

(59) misjuriL-badu, puka: Mme akasja:L-ba awati-tui tuNdi: kï-taL. 目が覚めると，外はもう明るかったから，慌てて出てきたよ。

(60) kju:-nu tiNni:-ja kawari:-du ausja:L. 今日の空は特別に青い。

(61) “a, baN-ja kju:-ga ju:-ja paNta aL-ba, qva-ga tauka: iki: ku:.” 「あ，私は今夜は忙しいから，おまえ１人（で）行って来い。」{note. 直訳は「私は今日の夜は繁多だから，～」}

3.2.2 [NP-ja (X) AP] 型：「事態叙述」の形容詞述語文

感情など，ヒトの内的な状態を表す形容詞述語文も主題をもつことができる。このとき，主語＝主題となるのはその内的状態のモチヌシである。このタイプの形容詞述語文は，談話，語りの中でヒトの内的な状態を説明的に表すのに用いられるものであり，よって，3 人称主語もゆるされる（66）。なお，その内的状態をひきおこす対象（X）は，文脈などによって明らかな場合は明示されないようである。

(62) “nara:, uja-uba: jagumisja:L-ba, pïtu-tukuru-N-ja usjami-N-na” 「自分は{ft. 私は}，父は恐れ多いので，ひとところには納めるな」{note. 同じ場所に葬るな，ということ}。

(63) aN-ja nama ati pukarasja: sji:L=do, qva-ga aNsi dikasji: buL-ba. 私は今とても嬉しくしているよ，君がこんなに立派になっているから。

間軸に位置づけられたアクチュアルなものとなり，テンス・アスペクトの形式をとって現れる。
・unu kwa:së: Mmasja:-taL-ba, mata ke: ku:. そのおかしはおいしかったから，また買ってこよう。

[15] 借用語。なお本用例の dame（ダメ）は外形的に名詞述語と同じであるが，現代共通語と同じく連体形は damena（ダメな）であり，別の品詞である。(61) の paNta についても同様。

(64) akazjumi-N-ja iruiru-tatidati aLru-ga, aN-ja taramabana-ni: sjumi-taL munu-nu-du de:N masu. 赤染めには色々なものがあるけど，私は紅花で染めたのが 1 番いい。

(65) agaiagaiagai, agai. Mma=jo: baN-ja:. ああ，もう。もう結構だ私は。

(66) muLane: Ndara:sjaN nar-aN-ni:, kaNkaja:-Nkanu uwa:ra-N, ko:ru, panaiki-u tati:, 守姉は（その子が）可哀そうでならないので，カンカー家 {note. 屋号 } の上手に香炉，花生けを立てて，

3.2.3 [NP_1-ja NP_2-nu AP] 型：「全体―部分」の形容詞述語文

[NP_2-nu AP] 全体で主語＝ NP_1 に対する述語となっており，NP_2 に位置する名詞は，NP_1 の指し示すコトガラの「部分」や「側面」である [16]。AP の直接の主語は NP_2 であり，「不足型」の名詞述語文に一部対応していると考える（3.1.2）。両者の違いは，このタイプの形容詞述語文では「直接の主語」が顕在的であるのに対し，「不足型」の名詞述語文では潜在的であることである。なお，NP_2 は ϕ 形式で現れることもできる（69）。

(67) kare: kïmu-nu-du asjasja:L. あの人は情愛がうすい。

(68) piNdabaN-ti:-ja mainicï futa:L-na:, nu:-Nke: idi:, ju:-N naL-kena buri: ukï du:L. asjugadu kunu, piNdabaN-ja sjikiniN-nu upusja:ri: ukï. 山羊当番とは毎日 2 人ずつ野へ出て，夜になるまで（そこに）いたようだ。だけどこの山羊当番は責任が大きかった。

(69) kare: asï nifusja:L. あいつは足（が）遅い。

また次の例は，NP_1 が時間名詞の形容詞述語文である。3.1.2「不足型」の名詞述語文のところで挙げた用例（46）～（48）と同じく，想定される直接の主語「気候が」が文中に現れていない。

(70) kju:-ja aqcja:L. 今日は暑い。

3.3 動詞述語文

3.3.1 [NP_1-ja (NP_2-ju/ba/ni) VP] I 型：「特性規定」の動詞述語文

NP_1 が「どのようなことをする，どのようなことになるものであるか」を説明，規定する動詞述語文である。NP_2 は VP が指し示す動きの対象（直接対象・間接対象）であり，これらを要求しない動詞述語の場合には現れない。また，このタイプの動詞述語文がさしだすコトガラは基本的に非アクチュアルであり，状態動詞を除き（78），完成相・非過去形以外の形式はとらない。

なお，動詞述語文の ja 構文で最もよく現れるのは 3.3.2 で見る「事態叙述」の文であるが，先述の形容詞述語文に合わせ，この「特性規定」を「I 型」とした。

[16] 野田（1996）では新聞記事などの例を挙げ，「「～が」の名詞が「～は」の名詞の「部分」や「側面」になっているとはいいにくい場合も多い」ことが指摘されている（p. 36）。多良間島方言についてはまだ用例が少なく，「部分」「側面」という説明に収まるものであるため，このように記述しておく。

(71) qfazime:, mata ja:-Nka bu-tui-mai junaka-du upusja nakï-ba pïru-nu nakï kui-ja jo:iN kïk-ai-N, ヤモリはまた家の中にいても夜中大きく鳴くから，昼の鳴く声は容易に聞けない，

(72) unu jado: sugu-du akï=jo:. その戸はすぐ開くよ。

(73) wa:-nu akazï:së:, ati judi su-taka: kupasja naL. 豚の赤身は，あんまり茹でると固くなる。

(74) "janafucë: du:-Nke:-du ma:L." 「悪口は自分に回る {ft. 戻る }。」

(75) "azja-gama, kaNsinu ju:-du tura: mura-Nke: ki:, pïtu-nu qfa-uba: nusumi: ikï-ti:-ja a[r-aN. agai utuqranu." 「兄さん，こんな夜虎は村へ来て，人の子供を盗んでいく {ft. さらっていく } んだよね？ああ，恐ろしい。」

(76) utuLgutu-N a:sji: mi:L-badu umukuto: NdiL. 恐ろしい目に遭わせてみると知恵は出る。

(77) aufukure: pïgurasu-badu no:L. 青膨れは冷やしたら治る。

(78) kanu pïto: tarama-nu rekisji-u ju:-du qsïsji: wa:riL. あの人は多良間の歴史をよく知りなさっている。

以下の（79），（80）では，時間の副詞などにより，その「動き」が習慣的なものであることが明示されている。また，その「特性」が過去のものである場合，動詞は過去形で現れる（81）。

(79) sju:-ja mai-sutumuti, akacïkï-N paru-Nke: wa:L. おじいさんは毎朝，あかつき（の時刻）に畑へいらっしゃる。

(80) ifucï nariqte-mai, kanu gaba sju:-ja, sjiwa-te:N sïmiL. 幾つなっても，あの古主は {ft. 年寄りの夫は }，心配ばかりさせる。

(81) iMsje:-ja akasjanagï-u sï-tui-du iMke: ikï-taL-ti:. 漁師は赤褌をして海へいっ（てい）たそうだ。

また，NP_1 が，VP の示す動作の主体ではなく，その動作が関わるコトガラである場合もある。

(82) kunu:L-nu aizjume:, aïcïbo: ar-aN-gutu, poribakecu:-du cïku:-ga jau=jo:. 最近の藍染めは，藍つぼじゃなくて，ポリバケツを使うようよ。

(83) icina:-ja cjawaN iqpai-nu sjaki-u auL-Nki: ma:sïma:sï sï:. 「イチナー」は茶碗 1 杯の酒を（一気に）あおりきって（皆で）回していく。

3.3.2 [NP_1-ja (NP_2-ju/ba/ni) VP] II 型：「事態叙述」の動詞述語文

NP_1 は，語りや談話の中で説明的に述べられるデキゴトの動作主体，状態のモチヌシであり，その表されるデキゴトは時間軸上に位置づけられている。よって動詞述語は基本的にテンス・アスペクトの形式をとる。主語＝主題は「関連の主題」である。

(84) kunu kiNgjo: Mme sïni: buL. この金魚はもう死んでいる。{note.「金魚が浮いている

のを見て」という前提 }

(85) a: aNsji:=na-ti:, akirami-tui kunu ka: dusï-gama: ja:-Nke: muduri: ukï=sja:.
（金持ちの友達に冷たい言葉を言われたので）「ああ，そうか」と諦めて，この貧乏な友達は家へ戻ったんだよ。

(86) aN-ja mainicï aka:nugaN wazja-u si:L=do:. 私は毎日はかどらない仕事をしているよ。

(87) “ma:Nti:, nara: unu tama-uba: numi:-du ukï, nama pakïdiqzi:”-ti sji: pakïdiqte:,
「確かに，自分 {ft. 私 } はその玉を飲んでいる，今吐き出すから」と吐き出して，

(88) qfa-garasja-nu tabaL-tui upuganu cïnu:, paqtagapqta-ti: cucuki: buL-ke:, unu ai-N Mma-garasja:, nara to:ka-sji: niku: M:na fe:qti:, 子烏が集まって大きな（牛の）角を，カチンカチンとつついているうちに，その間に老烏は，自分１人で肉を全部食べて，

(89) sïbadu Mme, unu aida-N unu bikiduM-ja, gabjo:-ba sji: buL-ba, するともう，その間にその男は痩せているので，{note. 直訳は「痩せをしているので，」}[17]

語りの地の文に現れる以下のような例は，セリフの部分の「発話主」を示す典型的な「関連の主題」である。

(90) Mme ozji:saN-ja, “cja:-ju fukasji: ki: sïkiru”-ti: unu oba:saNke: wa:L-tika:-du,
もうおじさんは，「茶を沸かして来て差し上げなさい」とそのおばあさんへおっしゃると，

(91) sja:ro: Mme, “a:kicjami, kure: nu:-ga sju:-zï:=ga”-ti baNkï-badu, （何者かに尾を掴まれ，）猿はもう，「うわー！これはどうしたらいいんだ！」と叫ぶから，

また NP_1 = 2 人称代名詞のとき，その動詞述語文は，広い意味でのはたらきかけの文となっていることが多い。例えば，動詞述語が命令形の形をとるほか（92），疑問文の形をとって〈依頼〉や〈促し〉などの語用論的な意味が表される（(93)，(94)）。

(92) “usï-nu cïnu-nu-du, de:Nga: Mmasja:L-ba, qvata: uru: qfai” 「牛の角が一番おいしいから，お前たちはそれを食べなさい」

(93) qva:, sjakamacuge-ja tura[ri-N. あなたは逆まつ毛は取れない？

(94) agui, qva: nu:-ba sji: buL. まったく！おまえは何をやっているんだ。{note. 仕事を言いつけた子供がぼーっと立っているのを見て }

3.3.3 [NP_1-ja NP_2-nu VP] 型：「全体―部分」の動詞述語文

先にみた 3.2.3 の形容詞述語文と同じく，[NP_2-nu VP] 全体が主語＝ NP_1 に対する述語であり，NP_1 と NP_2 は「全体」と「部分」・「側面」の関係となっている。以下の用例ではいずれも状態性の強い動詞述語が現れ，NP_2 とともに NP_1 の指し示すモノゴトの属性を規定していることから，その主題のタイプは「判断の主題」である。

[17] 特性形容詞 gabjo:sja:L（痩せている）の準体形の ju 格形式と動詞 sï:（する）がくみあわさって，全体で自動詞相当にふるまっている例である。便宜的にここに位置づけておく。

(95) kare: kunuure: aka-nu pagi-tui uja-N M:sja nari: kï:. あいつは最近髪がハゲて，父親に似てきた。

(96) akanai-ja bikimi:-ni: iru-nu-du kitati:L. イチモンジブダイは，雄雌で色が違っている。

3.3.4 デキゴトにかかわる補語が主題化された動詞述語文

動詞が述語となる ja 構文には，先に見た，動きの主体が動詞述語文の主語＝主題となるタイプの他に，デキゴトにかかわる補語が -ja にとりたてられて主題化され，主語の位置に現れるタイプがある。なお紙幅の都合上，本稿ではそのいくつかの用例を示すに留まり，主題化されるそれぞれの要素についての詳しい考察は別稿にゆずる。

(97) aïdama-u sïkumaqzji-ba, aïgame: Nda-N-ga katazuki: ukï. 藍玉を仕込むから {ft. 藍玉を仕込みたいけど}，藍がめはどこに片づけた（か）。

(98) kutusï-nu a:pu:L-nu zjiN-ja Mme usjamiqta. 今年の粟の初穂祭りのお金はもう納めた。

(99) miNnauki-Nke: kugï-ba sji:, wa:L-badu, Mme nara-ga fune: aka -nu-du ïzi: kï:. 水納沖へ（舟を）漕いで，なさると，もう自分の舟（に）は海水が入って来る。

(100) uma-N-ja gomi-nu-du ari: ukï=na:. そこにはゴミがあったな。

(101) tarinicï-Nke:-ja sjaki-tu Msju: a:sji: nuM-badu no:L. 長引く熱へは酒と味噌を合わせて飲むと治る。

(102) saifuNka: akazjiN-nu pïqcu:-tuM ne:N. 財布には 10 円玉が 1 枚もない。

4. その他の ja 構文

4.1 存在動詞 aL 述語文

4.1.1 [NP_1-ja NP_2(-ni AL)] 型：所在文

存在動詞 aL（ある）が述語となり，NP_2 には，NP_1 の在りかを示す場所名詞が現れる。以下の用例で条件節や伝達の終助辞を伴っていることからも明らかなように，主に NP_1 ＝主題の在りかを相手に伝える場合に用いられる。なお，ni 格助辞と存在動詞 aL が共に現れないこともある（104）。

(103) kunu micü: masu:gu wa:L-taka:, jakuba: uma-N aL. この道をまっすぐ行かれたら，役場はそこにある。

(104) kama-ga ja:-ja akasjuLja:-nu taNka:=do:. カマの家は床屋の向い（だ）よ。

4.1.2 [NP_1-ja NP_2-nu AL] 型：「所有関係」の存在文

存在動詞 aL（ある）が述語となり，NP_1 に現れる名詞が指し示すモノゴトは，広い意味で NP_2 が存在する「場所」を表す。用例数が少ないためさらなる検討が必要であるが，ここでは便宜的に「所有関係」の存在文と呼んでおく。

このタイプは存在文の 1 種であり，一見，場所を表す ni 格名詞がとりたてられている（100）などと同じように見えるが，NP_1(-ni) の代わりに NP_2-nu を主題化することができず，（100）のタイプとは統語論的に異なるものである。またこのタイプの ja 構文では，NP_1 に想定される ni 格助辞が現れないのが普通のようである。

（105）qva-ga tukuma: nu:-nu akïnaimunu-nu-ga aL. あなたのところは何の商品があるか。
（106）kuga-nu akacuko: eijo:-nu aLru-ga ati fu:-ja du:-Nke: baLra:L=do:. 卵の黄身は栄養があるけど，あまりに食べるのは体に悪いよ。
（107）asjugadu mutunuse: kau nusï-Nke:-nu, uqka-nu-du kanagai-kara a-taL-gi munu. だけど元主は（その牛を）買った主への，借金が昔からあったらしい。

4.2 否定文

4.2.1 [NP_1-ja NP_2-ja COP-NEG] 型：「非包摂関係」の名詞述語否定文 [18]

NEG は否定辞を指す。3.1.1 で見た「包摂関係」の名詞述語の否定文であり，NP_1 が「NP_2 ではない」ことを説明する文である。なお，NP_1 は文中に現れないこともある（111）。

（108）“a, kunu akapaN-ja, tada-nu paN-ja ar-aN, kure: ukaqtu-nu niNgiN-ja ar-aN=gumata”. 「あ，この赤い斑紋はただの斑紋ではない，この人は軽々しく扱って良い人間ではない。」
（109）kunu:L-nu aizjume:, aïcïbo: ar-aN-gutu, poribakecu:-du cïku:-ga jau=jo:. 最近の藍染めは，藍つぼじゃなくて，ポリバケツを使うようよ。 （= (82)）
（110）unu zjiN-ja, zjiN-ja ar-aN-gutu kabü: jakï-taL karapai-du a-tari:, そのお金は，お金ではなくて，紙 {note. 紙銭のこと } を焼いたカラ灰だったから，
（111）agu:i aN-ja ar-aN=jo:. あれ，私ではないよ。

4.2.2 [NP_1-ja NP_2-ja NE:N] 型：「非所有関係」の ne:N 述語否定文

4.1.2 で見た「所有関係」の存在文（[NP_1-ja NP_2-nu AL]）の否定文であり，[NP_2-ja NE:N] 全体で NP_1 に対する述語となっている。

（112）akabatabuko: duko: ne:Nni: sjawarabamai heiki=do:. オオジョロウグモは毒はないから触っても平気だよ。
（113）nika: Mme tui-ja ne:N nika-nu mute:, aNsinu ba:. 猫はもう年は無い，猫の分は，そういうこと。{note. 民話「十二支由来」の語りの中で。}
（114）Mme uma-kara kaju: pïtu-nu Mme:, ti:-ju a:sj-aN-gutu-na-nu pïto: ne:-dataM-ti:. もうそこから通う人たちは，（お爺さんの墓標に）手を合わさない人はなかったそうだ。

[18] なお，3.1.2「不足型」の名詞述語の否定文の用例は確認できていない。

4.3 [指示代名詞 -ja (NP-ja) X]

目の前の事態を指示，その事態への話し手の判断が述べられる。感嘆詞・終助辞と共起することが多く，かたりの地の文には現れない。また，指示代名詞のあとに普通名詞句主語が現れ，[指示代名詞 -ja NP-ja X] のような形になることが少なくない。なお，ここでの X は任意の述語を意味する。

(115) “agai, kure: baga mucï kukuro: jana munu=na.” (母親の思惑とは逆に，継子ばかりが上手くいってしまうので)「ああ，これは，私の持つ心は嫌なものか」{ft. 〜，私の考えることはだめなのか} (= (44))

(116) ure: ata: autiN naL-tui tida-ganasï-mai ugamai-du sï. これは明日は青空になっておひさまも拝めるよ。

(117) sja:ro: Mme, “a:kicjami, kure: nu:-ga sju:-zï:=ga”-ti baNkï-badu, (何者かに尾を掴まれ，) 猿はもう，「うわー！これはどうしたらいいんだ！」と叫ぶから， (= (91))

(118) “agaija:ija:i, kure: kaM-nu sïma=na:, agaija:i” (海岸から浅瀬まで黄金がゴロゴロ溢れているのを見て，)「あれまあ！これは神の島か，あれまあ！」

4.4 [NP_1-ja X, NP_2-ja X] 型：明示的な対比

モノゴトを，それと同類・範列関係にある他のモノゴトから抜き出して，対比的に示す。対比される 2 つのコトガラが文中に示されており，「明示的な対比」である (X については 4.3 に同じ)。

(119) kïnu:-ja qva-ga-du isju: dikasutaLru-gadu, kju:-ja ba-ga-du dikasu-taL-ba, aiko=sjaika. 昨日は君が大漁だったが，今日は僕が大漁だから，あいこだな。

(120) nuzjakï-N-du, iNne:-N-ja miduMqva-nu Mmari, agaNne:-N-ja biki-qva-nu Mmari, 久松で，西隣には女の子が生まれ，東隣には男の子が生まれ，

(121) ïzu-ture: ïzu-nu aira-u-du fu:, M:-mï:rasje: M:-nu aira-u-du fu:. 魚 (を) 取る人は魚のあらを食う，芋 (を) 実らせる人は芋の選び残りを食う。[諺]

(122) “qvata: asïbi:ri=jo:. aNna: paL-Nke: kuL-u: kami: idiqti: kuqzi-ba =na:” 「あなたたちは遊んでいなさいよ。母さんは畑へこれを担いでいってくるからね。」

次の (123) では対比の相手が文中に現れていないが，デキゴトにかかわる補語がとりたてられて文頭に位置していることなどから，対比的な意味を帯びて「暗示的な対比」となっている。

(123) aiïzü:ba: jamatu-pïto: atinakutu fa:-N-ti:. アイゴは本土 (の) 人はあまり食べないんだってよ。

5. おわりに——まとめと今後の展望——

以上，多良間島方言の ja 構文の基本的なタイプについて，記述・考察を試みてきた。その結果は次のようにまとめられる。

○名詞述語文

a. [NP_1-ja　NP_2　(COP)] I 型：「包摂関係」，判断の主題

b. [NP_1-ja　NP_2　(COP)] II 型：「不足型」，判断の主題

○形容詞述語文

c. [NP-ja　AP] 型：「特性規定」，判断の主題

d. [NP-ja　(X)　AP] 型：「事態叙述」，関連の主題

e. [NP_1-ja　NP_2-nu　AP] 型：「全体―部分」，判断の主題

○動詞述語文

f. [NP_1-ja　(NP_2-ju/ba/ni)　VP] I 型：「特性規定」，判断の主題

g. [NP_1-ja　(NP_2-ju/ba/ni)　VP] II 型：「事態叙述」，関連の主題

h. [NP_1-ja　NP_2-nu　VP] 型：「全体―部分」，判断の主題

（i. デキゴトにかかわる補語が主題化された動詞述語文）

名詞述語文は外形的には 1 つの型しか現れないのだが，内容面においてそれらは大きく 2 つに分けられる。いずれのタイプもその主題は「判断の主題」であることを基本とし，「関連の主題」となるのは語りの地の文などで名詞述語がテンス・アスペクトの形式をとって現れる場合や NP_2 が形容詞に修飾され感嘆詞・終助辞と共起する場合などに限られる。

形容詞述語文には 3 タイプみとめられる。まず c について，名詞述語文の a に対応し，AP には NP にコンスタントに存在する「特性」を表す形容詞が現れる。よってその主題は基本的に「判断の主題」であり，「関連の主題」となる場合は，形容詞述語の形式や時間の規定語など，他の要素に条件づけられている。d について，このタイプはいわゆる感情形容詞が述語となる場合に限られる。主語＝主題となるのはその内的状態のモチヌシであり，談話，語りの中で説明的に用いられる。そしてその主題のタイプは原則的に「関連の主題」となる。また e は，現代共通語の「象は鼻が長い」型の文に相当するものであり，NP_2 は，NP_1 の指し示すコトガラの「部分」や「側面」である。名詞述語文の b に対応し，その主題のタイプもやはり「判断の主題」である。

動詞述語文にも，補語の主題化を除けば，同じく 3 タイプみとめられる。だが形容詞の場合とは異なり，動詞述語文の ja 構文で最もよく現れるのは g の「事態叙述」の文であり，主題のタイプでいうと「関連の主題」である。表されるデキゴトが時間軸上に位置づけられており，動詞述語は基本的にテンス･アスペクトの形式をとる。これに対し，f, h はそれぞれ形容詞述語文の c, e に対応しており，状態性の強い動詞述語文が現れ，テンス・アスペクトの形式をとらないことが多い。なお先述したように，補語の主題化（i）については稿を改めて論じる。

この他，述語の種類によらない ja 構文のタイプとして以下のものがみとめられる。

○存在動詞 aL 述語文

j. [NP_1-ja　NP_2(-ni　AL)] 型：所在文，NP_2 = NP_1 の在りか

k. [NP_1-ja　NP_2-nu　AL] 型：「所有関係」の存在文，NP_1 = NP_2 の所有者

○否定文

l. [NP_1-ja　NP_2-ja　COP-NEG] 型：「包摂関係」の名詞述語文（a）の否定文

m. [NP_1-ja　NP_2-ja　NE:N] 型：「所有関係」の存在動詞 aL 述語文（k）の否定文

○指示代名詞主語文

n. [指示代名詞 -ja　(NP-ja)　X]

○対比構文

o. [NP_1-ja　X，NP_2-ja　X] 型：明示的な対比

n を除き，上記 a から o の ja 構文のタイプはいずれも，現代共通語の「は」の文にもみとめられるものである。したがって，多良間島方言の助辞 -ja は，基本的には現代共通語の「は」と同様の文法的機能および「意味」を持つと言ってよいだろう。

だが同時に，全く同じではないことも，n のタイプなどから明らかである。本稿ではとりあげなかったが，以下の（124）のように，NP-ja が連続して現れる用例も数多く確認している。

（124）nacë:，sutumuti-nu gozji-bakaL-kara tiN-ja akagami: kï:.　夏は，朝の 5 時頃から空は明るくなる。

名詞句同士の関係性は「全体―部分」であり，e の「全体―部分」の動詞述語文に含めうるだろうが，このような文は現代共通語の「は」では許容されにくい。

今後は，今回扱わなかった -ja の文―節が主題になっている文，述語節の -ja―の分析，またその他の主題を表す形式との比較を進めるとともに，（124）のような現代共通語の「は」に対応しない -ja の文についての記述，考察を行っていきたい。

参　照　文　献

樋口文彦（2001）「形容詞の評価的な意味」言語学研究会（編）『ことばの科学』10: 43–66. 東京：むぎ書房.
宮田幸一（1948）『日本語文法の輪郭』東京：三省堂.
森重　敏（1965）『日本文法―主語と述語―』東京：武蔵野書院.
野田尚史（1996）『「は」と「が」』東京：くろしお出版.
尾上圭介（1995）「「は」の意味分化の論理」『言語』24(11): 28–37. 大修館書店.
鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』東京：むぎ書房.
高橋太郎（1986）「形容詞のテンスについて」宮地裕（編）『論集日本語研究（一）現代編』137–161. 東京：明治書院.
山田孝雄（1922）『日本口語法講義』東京：寶文館.

On the *-ja* Construction in the Tarama Dialect of Southern Ryukyuan

SHIMOJI Kayoko

Okinawa International University
Postdoctoral Research Fellow, Department of Language Change and Variation,
National Institute for Japanese Language and Linguistics [–2011.03]

Abstract
The particle *-ja*, which corresponds to *-wa* in Japanese, is widely used in Ryukyuan languages in general. Previous studies on this particle have mostly focused on its morphological aspects such as allomorphy and combinatory possibilities with other particles, leaving aside other aspects such as grammatical function and meaning. Characterisation of *-ja* in Ryukyuan as compared with *-wa* in Japanese has also been left open for future research.

Focusing on Tarama (Southern Ryukyuan), this study aims to describe basic construction types in which *-ja* occurs, and their structures and functions. I will show that subject NPs marked with *-ja* in nominal and adjectival predicates denote what I call 'topic of judgement', whereas those in verbal predicates denote what I call 'topic of relevance'. Other *-ja* constructions include existential predicates with the existential *aL*, negative constructions, and comparative constructions.

Key words: Ryukyuan, Tarama, particle *-ja*